

厚徳寮々歌について

淺野 たけし

由來何處の學校にも校歌といふものがあり、寮には寮歌といふものがある。校風を偲び、寮生活を想ひ出すよすがとして、此ほど學徒を感奮激勵さすものはないと思ふ。

翻つて吾等厚徳寮に於て見るに、開寮以來一星霜半、舎監に於ては今村、灘上、松木諸師と變遷し副舎監に於ては灘上、多田、高木諸師と交代し、寮長は内川、藤山中村、諸兄を交送し寮生は現在八十余名を算し寮の隆盛は推して知るべきである。然るに寮歌がない。心の糧となり、想ひ出となる寮歌がない。なんと言ふ淋しいことであらう。文藝方面に興味を持たれてゐる方が居られる筈である。だのに今迄作られて居ない。なんとしたことであらう。

寮歌の無いことを嘆き寂しがつてゐるのは私だけではないと思ふ。どうかして立派な寮歌を得て、聲高らかに歌つて見たい。この心が遂に私をして次のやうな拙文を作らしめた。而して私のこの拙い歌詞が諸氏の立派な寮歌作成の一動機ともなれば之に越した喜びはない。

—昭和九年勅題奉戴記念日に稿す—
厚徳寮々歌

(一)

旭に匂ふ 聖人の御跡
憧憬れつゝも 勵まるゝこそ
幸の極みよ 御法の學徒
愛は一寮 同胞の如
宗祖の遺訓 纜に送り
前途に望む 理想の彼岸
樂しき團欒 あゝ厚徳寮

(二)

空摩す杉に不斷の微風
梢の月に靈の糧あり
耳をそばだて聞けよ聞かずや
妙法の谷、久遠の河に
「立正の曲」劉曉として
霸氣滿々と 漲り流るゝ
清淨の地よ あゝ厚徳寮

(三)

靈鷲山の頂に栖む
翼を擴げし荒鷺の如

蒼空に似し自由の天地

いざ飛ばん哉 雄々しく我等

その飛ぶ時を君想ひ見よ

破邪顯正の絶叫を聴け

希望ゆたかに あゝ厚德寮

―をばり―

誦 經 禮 讚

宇 佐 美 鍊 昌

何事にもあれ形式より内容に入るを常規となす。誦經に於ても又然り、我等が幼き頃解せず、知らず、耳に憶へ口に誦したる經もその功德や大なりし。小兒がたはむれに母を呼ぶ、答へざる母があらうか。識らず幼時の誦經は本佛への呼びかけであつた。

祖師の曰「小兒の乳を呑むに其の味ひを知らずと雖も自然に其の身を養ふ、耆婆が妙藥誰か其方を辨せん」と、宣なる哉況んや理解し、信仰加はるに於てをやである。深草元政和尚曰「誦經の利甚だ大なり、無量の珍寶を以て布施するも持經一偈の功に及はず」と。成佛が究竟の目的である我等は先づ第一に經に親む事が肝要と思ふ。六ヶ

敷い讀誦法謗論の如き理窟は兎角として、誦經は凡眼に映ずるだけでも吾人に心身の愉悅と爽快を齎す。喉を流れ出す讀經の聲に、必ず頻伽の如き美聲なくとも吾人は三昧の禪定境に入る事が出来、煩瑣な浮世の鬭争の氣分も複雑な頭痛の因も、遙か彼方に消える。正に此の世ながらの淨土である。娑婆即寂光の實利である。此の状態を佛の境界といふ乎。所謂「一時相續すれば一時の佛、一日相續すれば一日の佛、乃至千萬稔唱え相續すれば千萬稔の佛なり」の文はこの義趣を説示して余す所がないと思ふ、誦經を怠つて、やれ宗門の、説教のと飛び廻つて愧ぢざる所謂宗門の世俗的政治的説教家の態度は淺間しき限りである。自己の「行」を放棄して他人を教化しようとは不埒千萬も甚しい。それで誰が感動するか。若し感動したりとせばそれは一時的な催眠術的技巧に酔はされたに過ぎない、時が経てばキット元の心に還るだらう。

以上は誦經に就てであるが次に吾人は此處に誦經の藝術化を提唱する。例へば、下手な字も、上手な字も、其の意義に於ては何等異なる所が無い。併し其結果に於ては大なる異がある。而して藝術の香り高き筆墨は自然と人を引つける。然も藝術は往々實際よりも美的に吾人に迫る。縱令それが醜惡なものでも一たび畫家のカンバスに